壁を超えた、新たな口承文化と言うべきであろう。一九九二年二月二四日の「毎日新聞」は、子供たちが展示のアジア絵本を読む姿を、写真入りで大きく報道している。また一九九七年十二月六日「朝日新聞」に拠れば、柴田敏子ら伝承者が中国人花嫁母子の故国昔話を聴き、方言で再構成し、彼女たちと日・中両国の言葉で昔話交流する催しも行われている。

総体として真室川の試みは、何処までも心情的であった。昔話が心象の文化で在るが故に、その全てを人間性そのものとして結実させる。向後も、アジア昔話を視座にして「ふるさと伝承館」の実践が約束される。その目指し向かうところに齎される未知との対話こそは、この町が二十一世紀を生きる強靱な手掛かりとなる筈である。

（のむら・けいこ／主婦）

● 東京

故郷の語りから現代民話まで

松谷　みよ子

この広い東京に口承文芸はまた息づいているかと問われれば、たしかにある、と答えたい。しかし、私という人間の視点、ということは日本民話の会会員の一人としての視点、であること、をまず、お許しいただきたい。

東京に昔話の語り手はあるか。すぐに浮かぶのは西多摩郡檜原村の語り手たちである。高津美保子さんの編著によって国土社より『檜原の民話』として一九八七年に上梓されたが、そのなかから、倉掛の藤原ツヂ子さんの貧乏神の話を置く。

貧乏神

昔なあ、そこの家は貧乏で、何にもなかったんだって。そうして、それでもいくらか持って、

「何か食いもん買いに行ってくる」

とって、そのおじさんが出て行ったんだって。そいで出て行って帰ってきたら、炭を一俵買ってきたから、食べる物がないのに炭を買ってきたから、その奥さん怒っちゃってさあ、何も口もきかずに寝てしまったんだって。

そうしたらね、炭をここへいっぱい熾してひとりであたりながらね、

「おい、お前も起きてこいよ、暖かいからなあ、貧乏神も来うよう、暖かいよ。きょうはこんなに火があって暖かいから、おい、お前も起きて来うよう」

とって、かかあはもうふて寝しちゃって起きてこないんだって。

「貧乏神も来う、貧乏神も来う」

といったらね、貧乏神が、すんごいひげっつらの、すんごいかっこうしたのがね、ぼろをこんなに大きくまとめて、そいで貧乏神がやって来たの。「あたらしてくれろ」とってね。

「そんなに呼ばれちゃ、おれもね、じっとしてはいられないから、あたり来たから、あたらせてくれ」
って、そういって貧乏神が下りてきたんだって。ほいで、
「まあ、貧乏神も、あたれよ。きょうは、何もごちそうはないけんど、この火がごちそうだ。こんなに暖かいからあたれよ」
とっていって、そうしてひとりでごきげん。
　したら、その貧乏神がな、
「こんなにいい気持ちの人を貧乏させといて悪かったから、これをくれるから、これからはそんなに貧乏っていうのはなくなるから」
とって、おもしろいものをくれたんだって。そで、
「これを飾って、神棚に飾って、そいで一生懸命お祈りして、ひとつずつあんまり欲張ることをしちゃいけないから、欲しいもの、どうしても欲しいと思ったら一つ、お願いしてみろ、出てくる」
　ほしたら、その亭主のゆうことにな、
「貧乏神がそれじゃ見てるところで、腹が減ってしようがにゃあから、米をしてくんにゃあかよ、米を出してくれりゃあひ、飯が煮えるからよう」
ってゆったんだって。
そうしたら、本当にね、米の袋がそこにおっ立ってたんだって。
　だからね、貧乏神だって神さまだから、いまでもくっついちゃいない。どんなに貧乏したからとって、そうに貧乏神は憎らしい憎らしいといわないで、そういうふうに同情心をかけたから、そこの家はよくなったんだとか何だって聞いた。

　この『檜原の民話』は、日本民話の会の高津美保子さんが十年の歳月をかけ、仲間と共に檜原を訪ねて、一冊にまとめたものである。この採訪のなかで高津さんは稀有の語り手である藤原ツヂ子さんに出会った。大正十二年、ツヂ子さんは倉掛の奥の茗荷平に生まれ、ランプの下で「さあ、今夜はどんな話をしてやろうかな」猟師だった父から昔話や、世間話をたっぷりと聞かせて貰って育った。多くの語り手がそうであるように、両親、祖父母、兄、先生、友人と多岐にわたる人びとからの話を、いまなお、いきいきと語りつづける。筆者も何回かその語りを聞いたが、チュイチュイと鳴きながらツヂ子さんを守るように山道を送ってくれる木の葉狐の話など忘じ難い。
　このほかに檜原村には多くの話者がいて『檜原の民話』に収められている。
　奥多摩にも天狗がずいぶんいたようで、天狗に出会った話、木伐り、天狗にこらしめられた話が残っている。採訪したのは渡辺節子さんで、八王子でも天狗を聞いている。歩いて記録に残したのが一九七三年、「あまんじゃく」という民話の研究会（現、日本民話の会）の雑誌である、少しく旧聞に属するが今も奥多摩を歩けば天狗の話は残っているのではなかろうか。面白いのはこのあたりの天狗は小坊主の姿で出てくることである。
　さて話を伝承の語り手に戻すと、ここでどうしても記しておきたいのが小平の中鉢カヨさんのことである。一九三三年、岩手県紫波郡紫波町に生まれ、東京には一九五三年ごろ上京、そのからだに、ぎっしりと紫波の語りをつめこんだまま、数十年が経った。カヨさんはすでに結婚、子育てに忙しかった。

このカヨさんと出会ったのが、日本民話の会の吉沢和夫さんである。小平から招聘されて、四回、民話に関する講座を開き、最終回の話が終わったとき、「お年寄りの昔話を聞いて育った方がいるのでは」と聴衆に語りかけたとき、手をあげたのが中鉢さんだった。その見事な語りに、恐らく吉沢さんは戦慄したのではないか。かくも完全な語りが残っていようとは。

その席には小平民話の会の人も何人かいて、このときからカヨさんの語りは糸をひきだすように引き出され、昔話、世間話、また年中行事など、中鉢カヨというすぐれた話者のすべてを小平民話の会は聴き、文字化したのである。

やがてこの昔話、世間話は、一九八七年に『紫波の民話――中鉢カヨの語り』として国土社から上梓された。責任編集はさきほど檜原にも通った高津美津子さんである。次に中鉢さんの語りを一つ、御紹介したい。カヨさんの特色は、カヨさんの娘時代の紫波弁がすこしも崩れることなく、語り口は淡々として、いつ聞いても、これまた崩れることはなかった。すこし早口のあの語りがいまも耳に残っている。というのは、この原稿を記すわずか一ヵ月前、九七年八月二十三日に、亡くなられたからで、となると「現在」というタイトルにそぐわなくなるかもしれないが、あえて記した。というのも、東京はさまざまな地方の出身者が多い。そうした人びとのなかに、耳をかたむければ、カヨさんのようなすぐれた話者がまだまだ、発見できるのではないかと思うからである。

中鉢カヨさんの語りのうち「雁取爺」の話の発端を御紹介したい。

麦わらおんじとそばがらおんじ

あるとこさ、その麦わらおんじとそばがらおんじってのが暮らしてらったずおんさ。んで、麦わらおんじ、とっても心のいいおんじで、そばがらおんじは、なんともはぁ、良くねえおんじだったずおん、根性の悪い。

ほんで、ある日、雨降ったっけ、

「ああ、きょうみてえに雨降るとき、泥鰌(どんじょど)笱かければ、いっぺぇ魚っこ入るべぇなぁ」

と思って、まあ、麦わらおんじ、かけるべかなと思って、中、こう外、見てらったずもさ。

ほうしたけ、それ聞きつけたそばがらおんじは、ほれ、心、良くねえわけだ。

「よしよし、だら、おれ先に行ってかけてきましょう」

つうことになって、川さ、ずっと川上の方さ、泥鰌笱かけたずおんさ。

ほして、麦わらおんじは、あのそばがらおんじの下の方さ、かけたずもん。

いいかげんたって

「入ってらべかなあ」

っと思って、見に行ったずもな。

まず、良くねえ、その心の良くねえそばがらおなじは、見に行ったずも、なんになんに、魚、入(へ)ってるどこでねえ、犬こ入っ

てらったずも。こう、べえっこな犬っこ一匹、入ってもらったずも。

「このちくしょう、こんたなものさ、入りやがて」

って、その犬ぶん投げたずもん、川の下の方さ。

ほんで、今度、いいかげんたって、この麦わらおんじは見に行ったずも。ええ方のおんじ、われの泥鰌筱、見に行ったけ、やっぱり魚こ入ってなかったずもさ。ほんでその犬っ入ってらったずも。

「あや、むぜこと。この犬っこは、ほれ鳴いてらあ、この雨どきぬれて、はあ、かわいそうだなあ」

と思ってさ、家さ連えて来て、飯食せたずもさ。

ほんで、その麦わらおんじ、べえっこな茶わんで飯食せれば、そのまま食っただけべえっここう大きくなって、大きな舟で飯食せれば、大きな舟の大きさだけ、みな大きくなったずも。

ひと椀だけ、ふた椀食わせればふた椀だけ、ずんがすんが大きくなって、という語りがあるが、大きな舟で食せるというのは珍しい。これは舟の形をした牛馬の飼料を入れる器だという。さてこのあと麦わらおんじは犬を連れて山へいくと、犬は猪をとってきて、雁取り爺へと話は進む。

私ども東京の人間は、この見事な語り手を喪ったのである。

さて次に私の住む練馬区の大宗に在住する語り手、加藤喜平さんを御紹介したい。私は二十年前より大泉に民話研究室を持ち、『現代民話考』全十二巻がそこから生まれた。その仕事のなかで、研究室の納所とい子さんが出会ったのが加藤喜平さんである。大正八年生まれ。うわばみの話を一つ記してみる。

うわばみ

昔、車夫が川越街道を歩いていたら、なりの立派な御新造さんがね。

「石神井までのせてってくれ」

ってたのむんで、車夫は車にのせて走ったところ、三宝寺のところで降りて、小判をくれたんだそうですよ。そして、

「おつりはいいですよ」

っていって、池の方へいっちゃった。人家もないのに、へんだなあと思っているとね、バシャッとかバシャンとか水音がしたんだって。車夫はびっくりして池の方へかけていってみたら、うわばみだったって。

いそいで車夫は腹がけの中にしまった小判を出してみたら、それは、うわばみのうろこだったんですって。これは熊野神社の主が、三宝寺池の主へ逢いにいったんだろうってことでしたよ。

つぎに世間話の語りについて記してみたい。いま東京で聞くことができる話といえば世間話ではないかと思う。世間話にもいろいろあって、ある狭い社会でしか通用しない話もあり、誰が聞いても面白い話もある。私の所属する日本民話の会の探訪にまつわる話などは狭い部類に入るかもしれない。なぜなら実名で語られるそれらの

話は、主人公が髣髴すればこそ面白く、タネはつきないのである。これらの話は年毎に新しく参加した探訪仲間に語り継がれ、泊りこみの研究会などでは最後のしめくくりとして、堅い勉強会のあとの疲れを吹きとばしてくれる。

また、仲間うちの話でなくても、繰り返し語られていくうちに、丁度子どもたちが「舌切り雀」や「桃太郎」をねだるように、あの話をしてとねだる光景も生じてくる。

その一つに吉沢和夫さんの語る「タイル」という話がある。少々色っぽいのでねだられるたびにその話はカンベンしてよというのが尚面白い。

学校でも工場でも会社でも、一つの社会の歴史の中の人物像を浮き彫りにしていく話が必ずあり、殊に学校では新しく入ってくる教師に飲み屋で語られるのが「あだ名」なのだという。話に尾びれがついて、語りこまれていくうちに、普遍的な話に育っていく。「タイル」もその一つだという。

タイル

えらいかたぶつのね、漢文の教師がいてね。タイルってあだ名なのよ。で、なんでタイルなんだってきいても教えてくれない。生徒とっつかまえてきいても、首をかしげてる。ところがラグビー部の生徒が話してくれてね。だけど女の人に一寸話しづらいのね。それをついしゃべっちゃったら、『現代民話考・学校』の〈学校の笑い話〉ってところに載っちゃった。そうしたらあんな厚い本なのに、読むやつがいてさ、電話がかかってくるんだ。先生、「タイル」の話よみましたよ、って。困っちゃった。

で、その話っていうのはね、その頃五時ごろまでで、学校が終わるんだよ。ラグビー部だの野球部だの練習してるし、教師のなかには将棋さしているのもいるし、で、五時になると手ぬぐいぶらさげて隣りの風呂屋へ行くんですよ。そうすると汗だくになった運動部の選手なんかも風呂屋へ行く。風呂屋の中では教師も生徒もすっ裸でしやべってるんです。そういう時代だったんですよ。

それで教師も何人か行っちゃ腰掛にかけて洗っている。そうすると、いたずらする奴がいてね、その漢文の教師が風呂にきてるときに限ってなんだろうと思うけどね、ものすごく熱いお湯を上の方からざーっと流すんです。その熱湯がタイルの上をざーっと流れると、足をパッとあげる人はいるわけだ。熱いからね。パッとね。ところが足だけじゃなく、パーッと飛び上る人が一人いるんだって。それが漢文の教師なんだって。それでね、あだ名がタイル。

ひと昔前の教師も生徒も同じ風呂屋に入ってわいわいやっている光景が目に浮かぶ。吉沢さんは、このほかにも一冊の本が出来そうなくらい、世間話の話者なのだが、題して〈新三郎ばなし〉というのをやるよというので、今年の夏の集会はみんなのおたのしみになった。

望月新三郎さんは、たとえば吉四六さんや彦市のように、名をいえばああ、あの人ね、とみんなに愛されている、いたずら好きの、

ひょうひょうとした、しかし一本筋の通った男なのだが、〈新三郎ばなし〉と名がつくくらいエピソードに富んでいる。そして、彼自身もまた語り手でもある。父君望月新之助さんから語り伝えられた「偽汽車」の話は貴重である。

むかしは鉄道といったって、今の汽車と比べたら玩具みてえなもんだった。陸蒸気といって、足の早い者なんか追い越しちまったくれえだ。

その頃の品川あたりは、そら淋しいところで、狸や狐もいっぱいいたな。今じゃ屠殺場の向こうまで埋め立てちまったけど、波がパシャン、パシャンとくる海岸ぶちを走っていたもんだ。それがよ、夜、こう陸蒸気が走っていくと、シュ、ポッポ、ポォーって音がしてきて、向こう側から汽笛を鳴らして、陸蒸気をやってくるだってよ。はじめのうちは機関士も、こら衝突しちゃかなわねえから、その度に停っちゃ様子をみてたんだ。

ところが一向に汽車はやってこない。こらぁおかしい、ってわけで、ある日の夜、えいかまうもんかって、スピード出して突っ走った。するてえと、正面衝突するかと思ったら、何ごともなく走っていった。

一夜明けて、八っ山の下からの線路のところに大狸が死んでいたということだ。まだ陸蒸気の頃は、単線だったんだから、向こうから、むやみに汽車がやってくるわけはないんだよ。まあ、狸は物真似が好きだったんだな。

さて、世間話の語りになると、語り手は数え切れない。私は『現代民話考』という現代の民話を集める仕事に十数年来とり組んでいるが、その内容も、河童、天狗、神かくし、軍隊、偽汽車、船、自動車、夢の知らせ、ぬけ出した魂、死の知らせ、あの世へ行った話、銃後、学校の笑いと怪談、ラジオ・テレビ局の笑いと怪談、木霊、蛇、狼、猫、狸、むじな、写真の怪、文明開化と、全十二巻、まだまだ終わるべきではないのだが、一段落したところである。

この現代の民話を問いかけると、さまざまの人が話をくださる。原稿の場合もあり、話してくださるといえば私どもが駆けつける。人はそれぞれ、その人なりの話を持っており、問いかけられるのを待っているのだと思う。呼び水が、聴く耳が必要なのである。ここでは戦争も東京大空襲も語られている。

行政にも聴耳の姿勢を持っているところもあって、東京都の中野区教育委員会では『中野の昔話・伝説・世間話』をまとめているし、大田区の教育委員会でも『口承文芸』がまとめられている。府中市教育委員会は『府中の口伝之集』、また調布市郷土博物館編の『調布の動物ばなし』などで、私がこれらの資料集に敬意を表するのは、語りをそのまま記録しており、これこそ東京の口碑と思われる点である。勿論、各区、各市で同様の取組みがされているかと思う。

このほか、東京の、いま、を考えてみるとき、手に掬いきれないほど多いのが、各企業、ビルのなか、建築現場などで語り継がれる笑い話や怪談であろう。『現代民話考、ラジオ・テレビ局の笑いと怪談』には、笑いが、怪談が繰り返し語りつがれている実感がある。また、一昨年、某建築会社のビルの工事現場では、組み立てられた

現場の、電灯を消してあるくそばからひとりでに点灯されていく。巨大な人影がふわりと浮かんで現場を流れ去る。写真の怪。そのほかにも次つぎに起こる怪異現象に、下請けの職人が仕事を拒否、遂に再度おはらいをした、などという話が、現場に働く人びとからまざまざと語られた。

学校の怪談を語る子供たちのことも忘れてはなるまい。子供たちのみならず「不思議な世界を考える会」という渡辺節子さんを中心とする小さな会が一九八五年よりつづいており、参加者はこもごも、自分の体験した不思議な話や、聞いた話を語り続け、記録を出しつづけている。

さらにもう一つの視点として、自ら語り手となろうとしている人びとのことをあげたい。作品を一言一句違えぬように語るストーリィテリングの人びとは、ちょっと口承文芸から外れると思うが、伝承の語り手の息づかい、語りをと目指す人びともいる。私の周囲でいうならば日本民話の会の「語りの勉強会」の人びとで、出身地の方言をも生かしながら語りつづけ、新しい語り手たちが生まれてきている。

福岡の大川市でいま私が採訪をつづけている江口松男さんは、祖父母に語りをしっかりとたたきこまれた。松男さんが従兄弟などに語っていると「そこんとこは違うごつ」と叱声が飛んだ。いま私たちも「そんとこは違うんじゃない」といいながら語りの勉強をしているのである。

（まつたに・みよこ／日本民話の会）

●奈良

大和の桃太郎と阿礼祭

―民話・童話に関するイベント小史―

斎藤　純

一　調査の現状

奈良県では、竹原威滋・丸山顕徳が指導する比較民話研究会が継続的に調査を行っている。すでに数冊の民話集を刊行し、橿原市の民話を編集中である。また、花園大学・古典と民俗の会と共に行った吉野町の調査成果も刊行され、現在は奈良市を調査中である。

もっとも、調査地の現状では伝統的な昔話の話型は少なく、伝説・世間話が多く採集されている。また、読書し、知識を持ち、解釈を語る話者が少なくない。課題として、こうした状況への新たな対応が模索されているところといえよう。

二　大和の桃太郎

(1)田原本町の桃太郎イベント

奈良盆地の中央に磯城郡田原本町がある。町は、昭和四〇年代に宅地化が進行し、田園文化都市構想によって整備を進めているところである。地域の歴史は古く、唐古・鍵遺跡は有名で、平成三年（一